

---

# 春色の約束

若山 かおり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春色の約束

### 【NZコード】

N7285R

### 【作者名】

若山 かおり

### 【あらすじ】

この春めでたく社会人となつた私。恋人の康弘と週末のデートの待ち合わせ中。電車の都合でいつも必ず私が先に来るのだけれど、それにしても今日は遅い。どうも人身事故があつたらしいのだけれど……。

桜庭春人さん主催の企画『candy store』出品作品です。

- ・各回「」に設定されたお題のお菓子を作品内に登場させる
- ・一話につき2000～4000文字
- ・ジャンルは自由

本作は『第1回 アイスクリーム』です。

いつものアイスクリーム屋さんの前で、私は康弘を待つ。

休日のY駅東口の地下街。楽しそうなカップルやおめかしした親子連れ、休日出勤なのか浮かない顔のスーツ姿の男性……この辺りの繁華街だけあって、めまぐるしく人が行き交う。

私はピンクのアイスクリーム屋さんの壁に寄りかかるようにして、向かいの噴水を見ていた。小さく時折大きく水が出る仕掛けで、水底から明滅する七色のライトで照らされている。今は、ぴょこぴょこと可愛らしく水が出ていた。

十時五分前。待ち合わせはいつも十時だけど、康弘は絶対に十時には来ない。彼が時間にいい加減なわけではなくて、単にダイヤの問題だ。彼が使う路線は十時の待ち合わせに丁度よい電車がないのだ。一本早くしようかと言つてくれたこともあるけれど、Y駅まで三十分くらいで着く私と違つて康弘は一時間くらいかけてここまで来る。更に早くなんて無理は言いたくない。

初めてのデートも待ち合わせはY駅だつた。あのときは改札口で待ち合わせたものだから、なかなか逢えなかつた。いくつもある改札口のうち、別のところに行つてしまつたのかと不安になつて電話したら、彼も同じ改札口にいると言つていて……。やつと逢えたとき、わずか五メートルの距離を携帯で話していく自分たちに可笑しくなつて、どちらからともなく笑いあつた。

約束の映画を見て、昼食を摂つた。そのあと何となくY駅の地下街をぶらついていたときに、たまたまこのアイスクリーム屋さんの前に来た。そして、たわいもない話をしていて康弘がふと足を止めて、唐突に言つたのだ。

「なあ、アイス食べようよ」

昼食を摂つてそれほど経つていなかつたから、私はあまりお腹が空いていなかつた。何故、アイス？と思つた。それが顔に出たの

だろう。康弘は顔を赤くして、頭を搔きながら言つた。

「俺、彼女とデートして、一緒にアイスを食べるのが夢だつたんだ」二十歳過ぎた男が言う台詞か、と内心突つ込みを入れつつも、そんな彼を可愛いと思つてしまつた。

康弘は私を初めての彼女だと言つた。私の方はと言えば、言い訳がましいけど中高一貫の女子校育ちで男の子とは縁がなかつた。クラスマートにはどこで知り合つたのか学園祭に彼氏を連れてくるような子もいたけれど、だから結局、私たちは似た者同士だつた。

康弘と私は一人してチョコミントを注文した。もともとこのフレーバーが好きだつたし、彼と同じものを食べたかったから。二人並んでアイスクリームを食べながら、今度からY駅で待ち合わせをするときはこのアイスクリーム屋さんの前にしようと約束した。

こうして私たちはこのアイスクリーム屋さんの常連になつた。初めは同じフレーバーを注文してゐた。それがいつの頃か、あえて別のものを注文して取替えっこをするようになつた。

雑踏に搔き消されながら、遠くから途切れ途切れに明るいメロディーが聞こえてくる。ちょっと先にあるデパートの仕掛け時計の人形たちが十時を知らせてくれる音楽だ。

もうすぐ康弘が来る。

康弘と私は、この春めでたく社会人になつた。私の生活はがらりと変わつた。

新しい人間関係。まだ新人だからと手加減してもらつてゐるのを感じつつも、時折、先輩から与えられるプレッシャー。

そして、なにより康弘と逢えない。

社会人になつて逢える時間がぐつと減つた。今までがおかしかつたといえばそうだ。康弘と私は同じ大学の同じ研究室に所属していて、自分の研究がきちんと進みさえすれば基本的にいつ学校に行つても良かつたから、いつも時間を合わせて研究室に行つていた。一日のうち寝ている時間を除いたら彼が存在しない時間の方が短かつ

たと言つてもいい。もちろん一人だけでいたわけではないし、眞面目にそれぞれの研究に取り組んでいたから、甘い時間を過ごしていわけでもない。でも常に隣を見れば康弘がいた。

目の前の噴水が、ざざあっと小さく、大きく交互に繰り返しながら水を噴き出す。私は見るともなく、それを目にしながら康弘のことを考える。

このところ、いつも空虚だ。朝、昼、晩と食事と同じようにメールのやり取りもしている。夜には長電話もする。でも駄目だ。私はこんなに康弘に依存していたんだろうかと、自分自身、呆れている。ああ、まだだ。発想が後ろ向きだ。

私は首を振る。これからやつと康弘に逢えるのだ。もつと楽しいことを考えよう。今週はお互い初任給が出たから、豪勢に高層ビルの最上階のレストランに行つてみようか、などと言つていたのだ。だから今日は素敵な日になるに違いない。

……私はふと、腕時計を見た。遅いと感じたのだ。

十時十五分過ぎ。私は感覚的に康弘の到着予定時刻が分からしい。明らかにいつもより遅い。

以前、康弘が遅れたときは、平日は家族に頼んでいる愛犬タロの散歩が長引いたからだった。タロは柴犬の雑種なのだが、長毛種の血を引いているらしく毛が長い。だから春先はブラッシングが大変だと言つていた。写真を見せてもらつたことがあるが、確かに柴犬には見えなかつた。また、タロの世話が長引いているのだろうか。

私は携帯を取り出すと、無意識に指が動いて登録してある康弘の携帯番号を呼び出した。

ブルー、ブルー……。

何度コールしても康弘は出ない。マナーモードになつていて、気づかない？

私は一度電話を切り、今度はゆっくりと確認しながらボタンを押

す。

プルー、プルー……。

携帯をぱたりと閉じて、ため息をつく。

「ええ！？ 人身事故？」

噴水の淵に座りながら高校生くらいの女の子が携帯に向かつて叫んでいた。待ち合わせの相手と話しているのだろう。噴水がざざつと大きく水を噴き上げた。水音がうるさかつたのか、その女の子は話しながら行ってしまった。

人身事故か。どの路線が事故に遭つたのかは分からぬけれど、康弘が来ないのだから、きっと彼の乗つた電車も影響を受けているのだろう。私は納得した。

せつかくの休日なのに、康弘はまだ来ない。彼のせいではないけれど、逢える時間がどんどん減つていて。噴水がざざつと大きく噴き上げては消え、また小さく噴き上げる。いつもなら和むはずのその動きが、せわしなくて鬱陶しい。そう思つてしまつ今の私は、きっとものすごい仏頂面だ。

「……落ちた人を助けるために、線路に降りた人が……」

突然、そんな言葉が私の耳を打つた。これだけの人ごみの中、どうしてそんな声を拾つてしまつたのだろう。私の頭をある可能性がよぎる。

まさか……。

いくらゴールしても出ない康弘の携帯。

噴水がひときわ大きく噴き上げる。ざわーっと大きな音を出していくはづが、何も聞こえない。大きく伸びた水の柱を七色のライトが照らし上げる。

康弘が、来ないのは……？

アイスクリーム屋さんの壁を、私の背中がずるずる滑つていく。

「栞！」

私の名前を呼ぶ声に、はつとした。

「遅くなつて」「めん！」

噴水の伸びきつた水柱が、糸が切れたようにふつと消えた。

「事故で電車が遅れて……。連絡しようと思つたら、家に携帯忘れていた。……つて、なんでお前、泣いてんだよ！？」

康弘は肩で息をしていた。ちょっと垂れ目のいつもの康弘だ。

「心配させないでよ！ 線路に人が降りたとか聞いて……、電話しても康弘が出ないから、もしかしたらつて思つちゃつて……。本当に心配したんだからね！ ……せつかくの休日なのに、やつと康弘に逢える日なのに。私、何でこんな思いしなくちゃならないのよ！」言つてすぐに後悔した。ハツ当たりだ。今までの康弘不足による不満が、爆発してしまつたのだ。案の定、康弘の顔がみるみるこわばる。

「待たせて悪かつたと、慌てて来てみりや、何だよ、それ？」

「ごめ……」

「何、愚痴垂れてんだよ？ 僕だつていつも栄と一緒にいたいさ。で、楽しみに来てみりや、この仕打ちかよ？ 僕たち、もう学生じやないんだぜ？ 甘つたれんなよ」

怖くて康弘を見ていることができなかつた。私の靴に涙が落ちていいく。

「栄は就職してからずつと変だつた。一言四つには逢いたい、逢いたいって言つて、そのくせ、一緒にいてもどこか浮かない顔ばっかりだ」

それは、逢つてゐるときはよくとも、すぐにまた別れなければならぬから。

「康弘、私のこと、嫌いになつた……？」

やつと声を絞り出した。

永遠にも感じられる沈黙が続く。

ふと、康弘が頭を搔く気配が感じられた。彼の癖だ。

俯いた私の頭に、尖つたようなそれでいて優しげな康弘のため息

がかかる。

「その台詞、『嫌いにならないでね』と同義語だつて分かつているか？」

康弘は私の頬を両手で包むと、無理やり私の顔を上げさせた。

「栄がストレス溜まつてているのは知つていたよ。だから一度だけだ。お前の阿呆を許すのは」

ふつと、康弘の周りの空気が変わる。

「俺たちが平日逢えないのは、俺とお前がずっと一緒にいるための第一歩だろ？ 栄にそれだけ思われるのは悪い気はしない。けど、俺の相方はそれじゃあ困るんだよ」

「え……？」

「女つて安心感が欲しいものなのか？ けどさ、これを言つのはそれなりに勇気が要るんだ。言わなくとも分かっていると思つていたんだけ……」

そして、私の耳元でそつと囁く。

人通りの多いこの雑踏の中で、私の耳は確かにその言葉を聞き取つた。

その日は結局、高層ビルの最上階のレストランへは行かなかつた。代わりに電車に揺られること一時間。康弘の愛犬タロと散歩をした。

そして。

「昨日の今日で、いきなり連れてくるとは思わなかつたわよ」と、左手の薬指に綺麗なダイヤの指輪をはめた康弘のお姉さんに意味ありげに笑われたり、いつの間にか康弘の家に私専用の箸や茶碗が用意されてたり……。

それはまた、のちの話。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7285r/>

---

春色の約束

2011年7月23日03時27分発行